

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第97回

万葉の川心

元横浜市立子安小学校 教諭

澤井園子

鳥に寄せたる歌

(巻第七 一三六六番歌)

明日香川 七瀬の淀に 住む鳥も

心あれこそ 波立てざらめ

お茶を習ってみませんかと知り合いに誘われた。道と名の付くものは子ども頃に習った書道以来だ。多くの所作を経ながら、おもてなしに心を配る。抹茶は好きだが、茶道となると敷居が高く物怖じしてしまう。けれど、なぜか道具だけがぼつりぼつりと家に集まっていたのは不思議な縁とも言える。皆さんが自分らしく気軽に楽しんでいる教室という先生のお言葉を信じ、緊張しながらお稽古初日の門をくぐった。

「明日香川の多くの淀みに住む鳥だとて、心があるからこそ波を立てないだろうのに。」明日香川の、数多く流れが滞っている所に住んでいる鳥でさえも、心あればこそ波風を立てないのに……。不遇の場所、不運な状況、自分ではどうにもならない苦しい立場。生きていくと誰しも嵌る人生の「淀」。もう立ち上がれないと、もがいてじたばたし、波風も立つ。心あればの「心」とは何なのか。岩波の古語辞典によると、それは「意図」だという。考えていること、おもわく、目指していること。昔ならば「がんばる気持ち」「根性」「忍耐」となるだろうか。でも今は、「淀」こそが自分を見つけるチャンスなのではないかと感じ始めている。魂が真に望むほうへと舵を取る時がきたと、いっそこれを喜んでみようかと。愚痴や不満よりも、わくわくする新しい流れを上流に見れば、それこそが自分を運ぶ波となる。「無理だ」という声もよぎる

けれど、百の反対より、たった一人「YES!」という自分の声を信じてもいいのではないか。淀の中にも小さな幸せの種があるかもしれないと、淀に浸かり、ゆっくり眺めてみるのもいい。鳥のように高い視点で、川のように歌いながら。

明日香川の流れは、人々の生活に寄り添っている。「石橋」「川淀」「瀬瀬」の音「水行き増さり」「川下濁れる」「川門を清み」「川にみそぎしに行く」といった原風景であり、皆の心に響く実体感として、川が人のすぐそばで存在している。まさに、生活になくしてはならないもの、そして、文化の生まれる場所だ。私達は水から生まれ、どの瞬間も水の循環の中に息づいている。明日香(飛鳥)川は、奈良県明日香地方を流れる川で、奈良県高市郡の高取山を源として大和川に入る。写真の歌碑は、奈良県高市郡明日香村稲淵に建てられている。そばには国の史跡である明日香稲淵宮殿跡がある。そこは、大化改新後、中大兄皇子らが難波から明日香に戻って来た時に一時期宮んだ飛鳥川辺行宮の有力な候補地とされている。

お稽古が終わった。今この「瞬間」にこんなに集中したことがあっただろうか。とても清々しい。丁寧に生きることと心惹かれ始めた。しばしこの道を歩いてみよう。そう、季節毎の美味しい和菓子とともに。



奈良県高市郡明日香村稲淵の歌碑